

## 富山県魚津市でコオイムシの生息を確認

著者	澤田 研太, 岩田 朋文, 惣名 実
雑誌名	富山市科学博物館研究報告
号	43
ページ	69-70
発行年	2019-07-01
URL	<a href="http://repo.tsm.toyama.toyama.jp/?action=repository_uri&amp;item_id=1516">http://repo.tsm.toyama.toyama.jp/?action=repository_uri&amp;item_id=1516</a>

短 報

富山県魚津市でコオイムシの生息を確認\*

澤田 研太<sup>1)</sup>, 岩田 朋文<sup>2)</sup>, 惣名 実<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 930-0116 富山市追分茶屋90-1  
<sup>2)</sup> 富山市科学博物館 939-8084 富山市西中野町一丁目8-31  
<sup>3)</sup> 933-0223 射水市堀岡310

An additional record of *Appasus japonicus* Vuillefroy, 1864 (Hemiptera: Belostomatidae) from Toyama Prefecture, central Japan

Kenta Sawada<sup>1)</sup>, Tomofumi Iwata<sup>2)</sup> and Minoru Sona<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 90-1 Oiwakejaya, Toyama 930-0116, Japan  
<sup>2)</sup> Toyama Science Museum, 1-8-31 Nishinakano-machi, Toyama 939-8084, Japan  
<sup>3)</sup> 310 Horioka, Imizu-shi, Toyama 933-0223, Japan

1. はじめに

富山県におけるコオイムシ *Appasus japonicus* Vuillefroy, 1864の生息状況は、これまでに12地点から記録が知られているが、2017年時点でも生息が確認されているのは富山市内の1地点のみのようである（岩田ほか2018）。

筆者らは、富山県魚津市内において新たに1カ所の生息地を発見したので、同県における13カ所目の記録として報告する。本稿を記すにあたり、野外調査にご協力いただいた氷見市の中田達哉氏にお礼申し上げる。

2. 採集記録

コオイムシ *Appasus japonicus* Vuillefroy, 1864  
12成虫1幼虫（その他幼虫を含め多数目撃）、富山県魚津市内、15-IX-2018、澤田研太採集・保管；10成虫、同所、4-XI-2018、岩田朋文並びに惣名 実採集・保管（一部富山市科学博物館所蔵）。

3. 生息環境及び採集状況

採集した成虫（図1）は、林・宮本（2018）およびSuzuki *et al.* (2013) に基づいて同定した結果、すべてコオイム

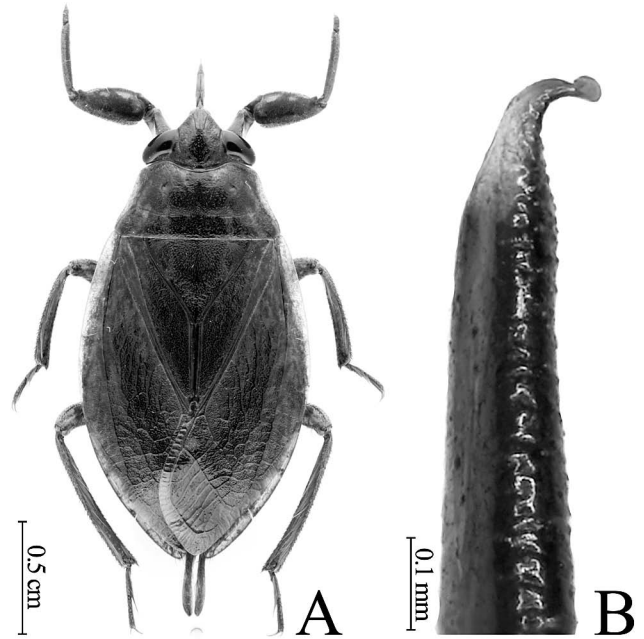


図1 魚津市産コオイムシ（A：成虫，B：♂交尾器右側 genital paralobe）。

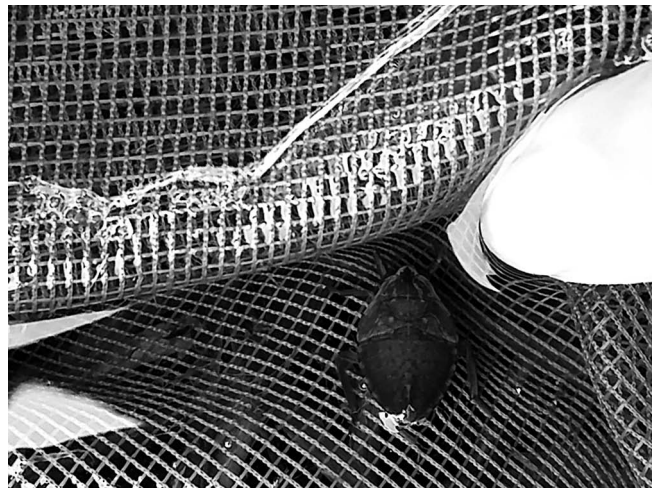


図2 魚津市産コオイムシ幼虫。

シであった。同地では近縁種のおオコオイムシ *Appasus major* (Esaki, 1934) がみられなかったため、幼虫も全てコオイムシとして扱った（図2）。

今回の記録地点は、魚津市内の山中にある中規模の池である（図3）。同地は山間部の窪地に水が溜まって形成された天然の池であり、周囲はスギの植林と落葉広葉樹林に囲まれ、山中から絶えず流入する沢水が水源と思われる。池の浅瀬には単子葉類が繁茂し浮島が形成され、水深が深い場所にはヒルムシロ類がみられた。コオイムシは岸際の浅瀬を中心に、池全域で多数確認できた。ま

\* 富山市科学博物館研究業績第550号

た、幼虫も発見できたことから同地で世代交代しているものと推測される。

岩田ほか (2018) によると、県内記録地のうち、信ぴょう性が高いものは全て標高約360 m以下の平地や丘陵地に属している (図4)。それらはほとんどの場所で記録当時に比べ環境が大きく変化しており、今後も人為的な環境変化が懸念される。一方で、今回の新産地は標高600 m台の山中にあり、付近に通行可能な車道や登山道もないため、池への到達は容易ではない。人の手により維持・管理が行われている形跡もないため、生息状況の悪化を招く著しい環境変化は起こりにくい場所と思われる。しかし、周辺の止水域を調査してもこの池以外では本種を確認できず、かつ、県内唯一の現存生息地 (岩田ほか, 2018) とは30 km以上の距離があり、その間に生息地が確認できないことを踏まえると、両地点は互いに孤立している可能性が高い。したがって、県内の生息状況は依然として危機的であることが予想される。今後も継続的な生息状況調査が必要である。



図3 魚津市内の生息地 (2018年11月4日澤田撮影)。

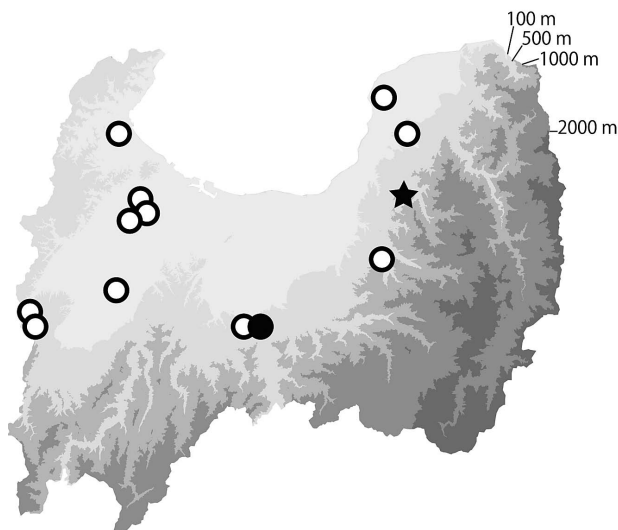


図4 魚津市の新産地および富山県におけるコオイムシの分布図 (★: 新産地, ○: 現在は生息が確認できない既知産地, ●: 現在も生息が確認できる既知産地)。(岩田ほか, 2018を改変)。

#### 4. 引用文献

- 林 正美・宮本正一, 2018. 半翅目. 日本産水生昆虫一科・属・種への検索一, pp. 329-427. 東海大学出版部.
- 岩田朋文・澤田研太・惣名 実, 2018. 富山県におけるコオイムシ (半翅目コオイムシ科) の生息状況の総括. 富山市科学博物館研究報告, (42): 41-47.
- Suzuki, T., T. Tanizawa, K. Sekine, J. Kunimi, & K. Tojo, 2013. Morphological and genetic relationship of two closely-related giant water bugs: *Appasus japonicus* Vuillefroy and *Appasus major* Esaki (Heteroptera: Belostomatidae). *Biological Journal of the Linnean Society*, 110 (3), 615-643.